

令和7年度

## 教職課程

### 自己点検・評価報告書

ノートルダム清心女子大学

令和8年2月

## ノートルダム清心女子大学 教職課程認定学部・学科（免許校種・教科）一覧

- ・文 学 部（英語英文学科（中・高 外国語（英語））、日本語日本文学科（中国語、高 国語・書道）、現代社会学科（中 社会、高 地歴・公））
- ・人 間 生 活 学 部（人間生活学科（中 家庭、高 家庭・福祉）、児童学科（幼、小、特支）、食品栄養学科（栄養））
- ・国 際 文 化 学 部（国際文化学科（中・高 外国語（英語）））
- ・情 報 デ ザ イ ン 学 部（情報デザイン学科（高 情報））

### 大学としての全体評価

本学教職課程に関する全体評価としては、建学の精神に則った本学の教育理念に基づく指導体制の充実によって、これまでに多くの教員を養成し、地域社会に貢献して信頼を得てきたことが挙げられる。その要因は以下のとおりである。第一は、建学の精神及び理念に則り、全学的に教職課程における教員養成の目的、目標を共有して教育を実施していることである。第二は、初等教職課程及び中等教職課程を軸に、各学科教職課程における学生一人一人に応じたきめ細かな指導を基本としていることである。第三は、各学科教職課程における指導を基本としつつ、教職課程センターを中核として、全学的に教職課程を運営する体制を整備していることである。第四は、大学の理念に即して設置されたインクルーシブ教育研究センターとの連携を図り、全学的にインクルーシブ教育を重視したカリキュラムを編成し教育を実施していることである。第五は、教育委員会との連携を図り、育成指標を踏まえた教員養成の実施に努めていることである。

その上で現在、緊要な課題となっていることは、情報通信技術を活用した教育の実施に必要な環境整備に努め、実践的な取組を充実させていくことである。今後も教職課程の実施に関する教職課程自己点検・評価を充実させ、2024年4月に開設した新学部新課程も含めた教職課程の質保証に向けて改善を図り、社会に貢献できる女性教育者の養成に努める所存である。

ノートルダム清心女子大学

学 長 津 田 葵

## 目次

I	教職課程の現況及び特色	1
II	基準領域ごとの教職課程自己点検・評価	
	基準領域 1 教職課程に関わる教職員の共通理解に基づく協働的な 取り組み	4
	基準領域 2 学生の確保・育成・キャリア支援	8
	基準領域 3 適切な教職課程カリキュラム	13
III	総合評価（全体を通じた自己評価）	17
IV	「教職課程自己点検・評価報告書」作成プロセス	17

## I 教職課程の現況及び特色

## 1 教職課程の現況

- (1) 大学名：ノートルダム清心女子大学  
 (2) 学部名：文学部、人間生活学部、国際文化学部、情報デザイン学部  
 (3) 所在地：岡山県岡山市北区伊福町2丁目16-9  
 (4) 教職課程の履修者数及び教員数

## ① 教職課程の履修者数

課程等（通学・通信・大学院）

令和7年度（令和7年5月1日現在）

学部	学科名	教科	免許種	教職課程履修者数						合計
				1年	2年	3年	4年	院	科目等履修生	
文学	英語英文	外国語(英語)	中学一種	0	9	12	15	3	0	39
			高校一種	0	9	12	15	3	0	39
	日本語日本文	国語	中学一種	0	18	17	21	0	0	56
			高校一種	0	18	17	21	0	0	56
			書道			4	9	0	0	13
	現代社会	社会	中学一種	0	12	8	4	0	1	25
		地理歴史	高校一種	0	12	8	4	0	1	25
公民		高校一種	0	12	8	4	0	1	25	

学部	学科名	教科	免許種	教職課程履修者数					合計
				1年	2年	3年	4年	院	
人間生活	人間生活	家庭	中学一種	0	18	10	7	0	35
			高校一種	0	18	10	7	0	35
		福祉	高校一種	0	0	2	2	0	4
	児童		幼稚園一種	0	54	61	57	1	173
			小学校一種	0	46	48	49	0	143
			特支一種			42	50	0	92
	食品栄養	栄養	栄養一種	0	8	6	12	2	28

学部	学科名	教科	免許種	教職課程履修者数				合計
				1年	2年	3年	4年	
国際文化	国際文化	外国語(英語)	中学一種	0	5			5
			高校一種	0	5			5

学部	学科名	教科	免許種	教職課程履修者数				合計
				1年	2年	3年	4年	
情報デザイン	情報デザイン	情報	高校一種	0	8			8

## ② 教員数

教員数	教授	准教授	講師	助教	その他
	44	23	9	2	6
備考：相談員・支援員など専門職員数（教職相談員6人）					

## (5) 卒業者の現況

課程等（通学・通信・大学院） 令和6年度卒業生（令和7年5月1日現在）

教科	免許種	就職先状況											
		認定こども園		幼稚園		小学校		中学校		高等学校		特別支援学校	
		正規	他	正規	他	正規	他	正規	他	正規	他	正規	他
	小一種					29	6						
	幼一種	15	1	6									
外国語 (英語)	一種							2	2				
国語	一種							3	1	2			
書道	一種												
社会	一種							1			1		
地歴	一種												
公民	一種												
家庭	一種							1			1		
福祉	一種												
	栄一種												
	特一種											3	

## 2 特色

本学教職課程の特色は、設立母体であるカトリック教育修道会、ナミュール・ノートルダム修道女会の創立者、聖ジュリー・ビリアートが教育者の育成に力を注いだことを踏まえて設置されていることにある。本学の建学の精神「心を清くし 愛の人であれ」は聖ジュリーのキリスト教的世界観を基底とした教育信念を表したことばであるが、それは、自らの人間性とそこに与えられている「良さ」を高め、そうした自己を他者のために使うことを意味している。

本学の教職課程では、聖ジュリーの精神を踏まえ、自ら生きる世界の中で、真に大切なことを見分け、愛を持って他者に寄り添い、社会に奉仕していくことのできる女性教育者を養成することを目指している。

本学教職課程においては、こうした理念に基づき、初等教職課程及び中等教職課程を軸に、各学科教職課程における取組を基本としつつ、教職課程センターを中核として全学的に教職課程を運営している。

さらに、大学の理念に即して設置されたインクルーシブ教育研究センターとの連携を図り、全学的にインクルーシブ教育を重視した教員養成を行っている点に特色があ

る。

教職課程センターは、全学的な組織であり、教職課程を履修する学生の入学から卒業後までの教職に関わる業務を担っている。具体的には実践的な指導力を向上させるためのボランティア・インターンシップに関わる業務、教員採用試験対策の業務、卒業生支援に関する業務等である。

<根拠となる資料・データ等>

『フランス革命期の女性宗教者ジュリー・ビリアート』、南窓社、2000年、p.42

## II 基準領域ごとの教職課程自己点検・評価

### 基準領域 1 教職課程に関わる教職員の共通理解に基づく協働的な取り組み

#### 基準項目 1-1 教職課程教育の目的・目標の共有

自らの生きる世界の中で、真に大切なことを見分け、愛を持って他者に寄り添い、社会に奉仕していくことのできる女性教育者を養成する。

世界に知的なまなざしを向けると同時に、他者との関わりを謙虚に見つめ、与えられたものの可能性を信頼しつつ自ら判断し、身近なところから他者とともに、世界を平和でよりよくすることに貢献できる女性教育者を育成する。(資料 1-1-1)

#### 〔現状〕

教職課程センターを中核として全学の共通理解を図り、初等教育課程および中等教育課程における実践的な指導力の向上、キャリア支援等を行っている。また、それらの業務を推進するために学内のインクルーシブ教育研究センターおよび教職相談員との連携、教育委員会との連携と情報収集を行っている。また、岡山県、岡山市、香川県等の教育委員会と連携して、本学対象の教員採用試験説明会および講師登録説明会を実施している。(資料 1-1-2)

初等教職課程では、教職員は学務部事務職員及び教職保育職の指導に関わる児童学科の教員で構成されている。年 1 回の初等教職課程・保育士課程連絡会と、学内 e 連絡システムの「2025 初等の会」のスレッドや児童学科会議の中で、教職履修、教育実習、教員採用試験、講師登録、学生の指導、卒業生支援の会などについて情報を交換・共有し、協議している。

中等教職課程では、教職員は学務部事務職員及び各学科（英語英文学科、日本語日本文学科、現代社会学科、人間生活学科、食品栄養学科、国際文化学科、情報デザイン学科）の教職担当教員で構成されている。中等連絡協議会を年間 9 回開催し、教職履修、教育実習、教員採用試験、講師登録、学生の指導、卒業生支援などについて協議している。

#### 〔優れた取組〕

教職課程センター会議を開催し、全学としての共通理解を図っている。

初等教職課程では、教職に関わる授業だけでなく、「教職履修カルテ」、「教育実習日誌」等を活用して学生個別の指導、相談に対応している。学生個別の案件については学内 e 連絡システムの「2025 初等の会」のスレッドや児童学科会議の中で、教員間で情報を交換・共有し、協議している。

中等教職課程では、各学科の教員が「教職履修カルテ」、「教育実習日誌」等を授業だけでなく学生個別の指導や相談に活用している。それらの状況を、各学科の教職課程担当教員が学科内で情報共有するとともに、中等連絡協議会において協議、対応している。

### 〔改善の方向性・課題〕

教職課程センター会議を中心に、全学としての共通理解の一層の充実を図る。

初等教職課程では、教職課程担当教員間で学内 e システムの「2025 初等の会」のスレッドや児童学科会議を通じて情報を交換・共有することに努める。

中等教職課程では、教職履修学生および教員が複数の学科に所属しているため、定例の中等連絡協議会以外に教職員間の情報共有、連絡調整に努めるとともに、学生への連絡、指導を適切に行うことが必要である。

### ＜根拠となる資料・データ等＞

- ・資料 1-1-1 : ノートルダム清心女子大学 『CAMPUS GUIDE 2026』、  
2025、p.96、<https://my.ebook5.net/ndsu-ebook/>
- ・資料 1-1-2 : ノートルダム清心女子大学 『学生便覧 二〇二五年度』、ノートルダム清心女子大学学務、2025 年、pp.250-251
- ・データ : ノートルダム清心女子大学 HP「教育ビジョン 2039」  
<https://www.ndsu.ac.jp/vision/>

## 基準項目 1-2 教職課程に関する組織的工夫

### 〔現状〕

全学的に教職課程を履修する学生を支援する教職課程センターを設置している。教職課程センター長 1 名（兼務）、教職課程センター教員 3 名（兼務）、教職相談員 6 名（幼保 3 名・小特 2 名・中高栄 1 名）、コーディネーター 1 名、事務職員 1 名、臨時職員 1 名が主として業務を行う。

教職課程センターを中核として、初等教職課程、保育士課程、中等教職課程、インクルーシブ教育研究センターと連携を図るため、教職課程センター会議を年 3 回実施し、全学としての共通理解を図って、教職課程を運営している。教職課程自己点検・評価の実施についても教職課程センターを中心として実施している。

教職課程教育を行う上での講義室の施設・設備の準備・調整を行い、ICT 機器を適切に利用した教育が可能となっている。教職課程に関する研究の成果を公表する場として、『ノートルダム清心女子大学教職課程研究』を年 1 回発行している。（資料 1-2-1）

また、教職課程に関する情報公開を『諸課程年報』や本学ホームページ等で行っている。

(資料1-2-2)

学校現場のGIGAスクール対応として、クロームブックを2021年度30台、2022年度40台、短焦点のプロジェクターを2022年度2台導入、超短焦点のプロジェクターを2024年度1台導入、さらに一部の学科でデジタル教科書を整備して、学校現場と同様の環境を整備した。さらにそれらを各教科の教育法の授業等で活用することで、教育実習においてICT活用に対応でき、教員として採用されたときに即戦力となる人材を育てている。

初等教職課程では、教職課程に関する情報を共有・協議するため、教員間での学内e連絡システムの活用、児童学科会議内での協議、毎年2月に初等教職課程・保育士課程連絡会を開催している。

文部科学省によって示されている教職課程認定基準を踏まえた教員を配置し、研究者教員と実務家教員及び事務職員との協働体制を構築している。また、教職課程センターと教職課程担当者との適切な役割分担を図っており、連携しながら教職課程のあり方についてよりよい改善を図るために、自己点検・自己評価を適宜行っている。さらに、定期的に授業アンケート等を行い、教職課程の質的向上に努めている。

中等教職課程では、文部科学省によって示されている教職課程認定基準を踏まえた教員を配置し、研究者教員と実務家教員及び事務職員との協働体制を構築している。また、教職課程センターと教職課程担当者との適切な役割分担を図っており、連携しながら教職課程のあり方についてよりよい改善を図るために、自己点検・自己評価を適宜行っている。さらに、定期的に授業アンケート等を行い、教職課程の質的向上に努めている。

### 【優れた取組】

教職課程センターでは、学校園の現場で校長や園長を経験した6名の教職相談員が、学生の進路に関わる相談や採用試験に関わる相談などに対応し、適切な助言を行っている。

(資料1-2-3)

初等教職課程、中等教職課程ともに、教育委員会との連携を図り、教員等育成協議会における育成指標を意識して指導を行っている。

特色ある取り組みとして、インクルーシブ教育研究センターとの連携を図り、合理的な配慮の必要な履修生も含め、教職課程履修生一人一人に応じた指導を行っている。

初等教職課程では、地域のNPO法人、各事業所、県教育委員会、特別支援学校、幼稚園、小・中学校等と連携した取り組みを実施することで、学外組織と協働した指導の充実を図っている。

中等教職課程では教職課程センターと学部教職課程担当者との適切な役割分担を図っており、さらに学部・学科間の連携を密にしながら教職課程のよりよい運営を目指している。

### 〔改善の方向性・課題〕

トリニティホール 2 階の利便性のよさを生かし、閲覧室の資料の充実に努め、閲覧室、相談室の一層の活用を促す。

研究者教員と実務家教員及び事務職員と連携を図って実施しているが、全学的により組織的な協働体制を構築するために、教職課程センター会議の充実に努め、教職課程センターと新課程を含めた各学部・学科教職課程担当者との連携を一層強化していく。

### ＜根拠となる資料・データ等＞

- ・資料 1-2-1 : 『ノートルダム清心女子大学 教職課程研究 第 1 号』、ノートルダム清心女子大学 学務部教職課程センター、2025 年
- ・資料 1-2-2 : ノートルダム清心女子大学 『学生便覧 二〇二五年度』、ノートルダム清心女子大学学務、2025 年、pp.250-251
- ・資料 1-2-3 : ノートルダム清心女子大学 『CAMPUS GUIDE 2026』、2025 年、pp.78-79、<https://my.ebook5.net/nds-u-ebook/>

## 基準領域2 学生の確保・育成・キャリア支援

### 基準項目2-1 教職を担うべき適切な学生の確保・育成

#### 〔現状〕

本学への入学希望者に対する教職課程についての情報は、「ノートルダム清心女子大学 CAMPUS GUIDE」に掲載している。(資料2-1-1) また、オープンキャンパスや高校訪問ガイダンスにおいて、教職の魅力、および教職課程の魅力を伝えている。

2022年度本学図書館の「NDSU 電子図書館」のジャンルに「教職課程」を新設して「教員養成セミナー」(時事通信出版局) および教員採用試験過去問題(先輩による復元問題)をオンラインで同時に多数の学生が閲覧できる環境を整備した。(資料2-1-2)

初等教職課程では、児童学科のアドミッションポリシーに合った学生を入試で選抜している。特に総合型選抜の入試においては、面接での人間性の評価を重視している。

中等教職課程では、本学への入学希望者に対する教職課程についての情報を、「ノートルダム清心女子大学 CAMPUS GUIDE」に掲載している。入学後の人材育成については、各学年で「教職課程説明会」を開催し、学生便覧を主な資料として、教職課程履修に関する情報提供を行っている。また、教員採用試験などの書籍を各学科の学生合同研究室に整備し、学生が自学自習できる環境づくりをしている。(資料2-1-3)

#### 〔優れた取組〕

教職課程センターの教職相談室では、教職についての相談や採用試験対策についてさまざまな支援を行っている。また、「ノートルダム清心女子大学 CAMPUS GUIDE」に「教職課程センター」「インクルーシブ教育研究センター」のページを設け、教職を目指す学生への学修支援及び教員採用試験対策講座の実施に関する情報を提供している。

初等教職課程では、オープンキャンパスの教員によるミニ講義時に、在学生に参加してもらうことで、高校生に入学後のビジョンを持たせる工夫をしている。その他に、児童学科パンフレット、高校訪問ガイダンス等で児童学科の魅力や学びを伝えている。

中等教職課程では、入学希望者に向けて配付される「ノートルダム清心女子大学 CAMPUS GUIDE」において、「卒業生からのメッセージ」の中で、中学校、高等学校教諭として活躍する卒業生の声や、教職を志望し夢を叶えた卒業生の姿を掲載している。教職課程履修希望者へは、「教職課程説明会」を通して教職課程履修についての情報提供を行っているが、履修手続きの確認だけでなく、教職に就きたいという願いや志をもって粘り強い努力を積み重ねることができるよう、教職で求められる資質・能力について、改めて考えさせる説明会として位置付けている。

## 〔改善の方向性・課題〕

初等教職課程では、教員志望の学生の減少、教員不足という社会状況の中、児童学科においても定員を満たしていない状況がある。教職の魅力の発信、児童学科の魅力の発信に努めているが、具体的な成果はまだ見られていない。本学の教職・保育職に係る免許や資格修得までの魅力について、HP やブログ等を利用して、高校生へ分かりやすく周知する必要がある。（資料2-1-4）

中等教職課程では、必要な情報提供や細かな履修指導は行えているが、情報提供の質、量、時期、方法などに関する適切なフィードバックが履修者から得られていない。今後は、ICT 機器を利用したアンケートへの回答などを利用して、取組の在り方を改善する資料を整える必要がある。

## ＜根拠となる資料・データ等＞

- ・資料2-1-1：ノートルダム清心女子大学『CAMPUS GUIDE 2026』、p.78、  
p.81  
<https://my.ebook5.net/nds-u-ebook/>
- ・資料2-1-2：NDSU 電子図書館 <https://web.d-library.jp/ndsuelib/g0101/top/>
- ・資料2-1-3：ノートルダム清心女子大学『学生便覧 二〇二五年度』ノートルダム清心女子大学学務部、2025年、pp.139-179
- ・資料2-1-4：ノートルダム清心女子大学『ノートルダム清心女子大学人間生活学部児童学科 すべては子どものしあわせのために』  
<https://my.ebook5.net/nds-u-ebook/>

## 基準項目2-2 教職へのキャリア支援

## 〔現状〕

初等教職課程では、次のようなキャリア支援を実施している。

- ・1年次4月の教職指導、1年次9月の教職オリエンテーション、2年～4年次4月の教職オリエンテーションにおいて、教職課程の履修についてその意義や方法を丁寧に説明している。
- ・教職履修カルテによる個別支援（1年次から活用し、学修状況や成果、課題を学生自身が自覚できるよう、教員がコメント等助言）
- ・採用試験準備の個別支援（公立保育職については市町村単位で試験が行われるため、学生によって試験時期や試験内容等が異なる）
- ・特別支援教育の学びに関する助言（学校現場で必要とされる資質・能力について、免許

状の取得について)

- ・小特コースは、「特別支援学校教員を目指して学ぶこと」と、「特別支援教育を学んだ上で小学校教員を目指すこと」の両方を指している。特別支援教育の学びに関する助言（学校現場で必要とされる基本的な資質・能力であること、免許状の取得について）を1年次から様々な機会に全学生に丁寧に説明している。

中等教職課程では、教職課程センターと各学科教員等が協働して、教員免許の取得や教職就業への意欲喚起と適性向上を目指し、入学当初から継続的に次のようなキャリア支援を実施している。

- ・教職課程説明会の実施（2～4年は7学科合同による学年別説明会と各学科別説明会を毎年新学年が始まる前の3月に実施、1年生は4月と6月に実施）
- ・教職履修カルテによる個別支援（個人の学修状況や成果の把握と課題の明確化を図り、助言）
- ・ボランティア参加支援（各教育委員会のボランティア情報の提供、学校支援ボランティア登録説明会の開催、附属小学校でのボランティア参加支援）
- ・教職相談室による個別支援（教職に関する不安や悩み及び教員採用試験出願に関する助言）
- ・選択科目「教職特講」による実践力強化（教育実習、採用試験、学校現場を想定した実践的指導）
- ・採用試験対策講座の実施（年間にわたって計画的に実施）
- ・情報提供の充実化（採用試験情報や対策講座等の案内を manaba folio で配信、附属図書館との連携により教育雑誌や採用試験受験報告書のデジタル情報提供）
- ・教職就業への直接的支援（各教育委員会と連携した採用試験説明会や講師登録説明会の実施による出願・受験・講師登録の促進）
- ・卒業生や在学生による教職就業意欲の喚起（採用試験対策講座等で受験者目線からの助言や激励）
- ・卒業生への支援（大学 HP に採用試験二次対策講座の情報を掲載）（資料 2 - 2 - 1）

#### 〔優れた取組〕

教職課程センターでは、次のような取り組みを行っている。

- ・教職相談室では、教職についての相談や採用試験対策講座（各課程の校種ごとに実施、年間合計 50 回程度）を行っている。教職相談員 6 名は学校園現場での校長や園長を経験しており、学生からの相談に適切な助言を行っている。また、インクルーシブ教育研究センターと連携した対策会では卒業生の受験者も参加できるよう、夜間の開催とするなどの工夫を行っている。

- ・教職学生閲覧室では、各自治体の採用試験過去問題、教職・保育職採用試験問題集、教科書、指導書を配架しており、教職・保育職に関連する求人票の閲覧が可能である。
- ・1年次から4年次までの教職課程履修者を対象に採用試験対策講座を行っている。
- ・教育委員会による教員採用試験学内説明会や講師登録学内説明会を開催している。
- ・学生の採用試験対策として、附属図書館と業務連携し、電子図書館に月刊誌「教員養成セミナー」と教員採用試験過去問題（4年生による復元問題）を掲載し、制限なしでアクセスすることができるようにしている。
- ・初等教職課程と連携して、卒業生支援の会を開催している。学校園の現場で働く卒業生に情報交換の場を提供し、日頃の授業や保育、学級経営の悩み等の相談に児童学科教員と教職相談員が応じている。

初等教職課程では、次の取組を行っている。

- ・1年次9月の総合演習の集中講義で、学内に設置されている附属小学校と附属幼稚園の両方の観察実習を行っている。観察実習後にそれぞれ小学校の校長・教頭、幼稚園の園長・主任との懇談も行っている。これは、1年次2期からの教職課程の履修を前に、小学校教育と就学前教育の様子を観察することにより、コース選択のミスマッチを防ぐためのものである。
- ・3年次10月に4週間行われる初等教育実習（幼稚園実習）では、2023年度より香川県内市町村、2024年度より岡山市・倉敷市以外の公立幼稚園でも実習を行うことができるように整備した。香川県より本学に通学している学生の負担軽減とともに、市町村ごとに行われる保育職採用試験への足掛かりとなると期待している。
- ・保育職では、私立や民間の幼稚園、保育所への就職希望者もふえているため、私立園への就職を考えている学生を対象とした対策講座等について、学科と教職課程センターとで計画し、学生一人一人の就職状況の把握に努めている。
- ・クロームブック70台を授業用に確保し、国語、社会、算数、理科のデジタル教科書を授業で活用できるよう整備している。
- ・夏季休暇中の学内閉鎖期間中に教職を志望している学生・卒業生を対象に教員採用試験二次試験対策会を行っている。「教職課程センター」及び「インクルーシブ教育研究センター」と協同し、本年度は学内施設閉鎖前と閉鎖期間中の2回実施した。閉鎖期間中は、本学ヨゼフホールの14の教室を会場に、模擬授業、面接等の練習を行った。
- ・受験予定の市町村別に学生が主体的に試験対策を活発に行っているため、教員も積極的にその教室に出向き、模擬授業等の指導を行ったり、研究室に招き面接等の対策をしたりしている。
- ・特別支援教育に関連した学びを進められるよう、インクルーシブ教育研究センターと連携した取組を行っている。
- ・岡山県総合教育センターと共催した現職教員研修会へ学生が参加するなど、現職教員と直接に場を共にして学ぶ機会を積極的につくっている。

中等教職課程では、入学時から卒業時に至るまで、教職課程センター・中等教職課程・各学科担当者が中心となって常に連携を図りながら情報提供や個別支援などを通して、各学年段階に適した教職へのキャリア支援を年間にわたって継続実施し、毎年組織的に教職へのキャリア支援の充実を図ってきた。学内のデジタル環境を活用し、manaba folio や電子図書館による情報提供の充実を図っている。

### 〔改善の方向性・課題〕

初等教職課程では、私立や民間の幼稚園や保育所への就職希望者が増え、学生一人一人の就職活動の把握が難しくなっており、きめ細かな指導が必要である。

中等教職課程では、教員採用試験の早期実施に対応できるように、2024年度より1年生の教職履修者から学内の教員採用試験対策講座や教育委員会が実施する教員採用試験説明会等について案内して参加を促している。ただ、特に教職履修者はそれぞれの時間割が埋まっていることがおおく、講座や説明会等に該当学生が全員出席することができず、時間設定に苦慮している。それに対して外部との日程の際に、学生が比較的参加しやすい水曜日午後でスケジュールを組むようにしている。

教職課程全体の教員採用試験対策として、新たに講師を招聘して近県の香川県対策を実施した。多数実施している教員対策講座の一覧を作成、可視化して学生に示すことにより計画的なキャリア形成に繋げるようにした。（資料2-2-2）

### <根拠となる資料・データ等>

- ・資料2-2-1：ノートルダム清心女子大学 『諸課程年報 第19号』、ノートルダム清心女子大学学務 2022年、pp.5-6
- ・資料2-2-2：ノートルダム清心女子大学 『諸課程年報 第23号』、ノートルダム清心女子大学学務 2026年、p.33
- ・データ：教職相談室利用状況，採用試験対策講座実施状況  
[https://www.ndsu.ac.jp/career/situation\\_teach.php](https://www.ndsu.ac.jp/career/situation_teach.php)

## 基準領域 3 適切な教職課程カリキュラム

### 基準項目 3-1 教職課程カリキュラムの編成・実施

#### 〔現状〕

初等教職課程では、特別支援学校教諭免許取得に関連する科目だけではなく、すべての学生が特別支援について学びを深められるカリキュラムを編成している。

中等教職課程では、カリキュラムの編成は「教育の基礎的理解に関する科目等」に対するコアカリキュラムについて、「教職課程認可基準」に基づく授業計画がシラバスに反映されたものとなっている。各学科におけるそれぞれの教科のコアカリキュラムについても同様である。また、インクルーシブ教育をカリキュラムに段階的に位置づけている。さらに、時間割の配置運用に当たっては、教職課程科目と教職課程以外の科目が適切に配置され、学生が無理なく教職課程を履修することが出来るよう配慮している。実施にあたって、両課程ともに履修カルテを活用し、個別の支援を行っている。(資料 3-1-1)

#### 〔優れた取組〕

初等教職課程では、1年次・2年次は基礎実習、3年次・4年次はインターンシップの授業をカリキュラム上に位置づけ、学生のボランティア・インターンシップの活動を単位化している。また、1年次から、インクルーシブインターンシップの授業をカリキュラム上に位置づけ、特別支援教育に関連する学生の活動を単位化している。

中等教職課程では、中等 7 学科（英語英文学科・日本語日本文学科・現代社会学科・人間生活学科・食品栄養学科・国際文化学科・情報デザイン学科）に、教職担当者各 1 名を必置として、それぞれの担当教員が各自の専門に関わる指導法等の科目以外に、7 学科全員が履修する教職科目を担当することにより、学科の枠を超えて担当者全員が、中等教職履修学生全員を把握・理解しながら指導していく体制を整えている。この体制を支えるために、毎月 1 回、教職課程中等連絡協議会を実施して情報共有を図っている。

#### 〔改善の方向性・課題〕

初等教職課程では、授業と実践との両輪で学びを支えていく必要性を実感しており、インクルーシブインターンシップの活動場所の紹介、ボランティア後の活動を振り返るポートフォリオ作成の指示を行っている。しかし、インクルーシブインターンシップについては活動場所と学生個人とのマッチングや紹介先に限界があること、ポートフォリオの作成に関してはフォローが難しいことなど課題が残っている。また、「情報通信技術を活用した教育の理論及び方法」が必修化される中、講義の中でさらに学生が ICT 機器を活用す

る力をつけることができるようにすることも課題である。

中等教職課程では、1年次前期に開催する教職課程説明会から始まり、各年度4月に中等教職課程全体でオリエンテーションを実施することにより、1年間の見通しを持った学生生活を送ることが出来るように指導している。この他にも、随時、卒業生の現任教員による講演会、県教育委員会によるコンプライアンス研修、学校支援ボランティアへの組織的支援など、様々な取組を通して、教職履修学生全員が卒業までに実践的指導力を身に付けることを課題として取り組んでいる。

#### <根拠となる資料・データ等>

- ・資料3-1-1：ノートルダム清心女子大学 『学生便覧 二〇二五年度』、ノートルダム清心女子大学学務、2025年、pp.117-179

### 基準項目 3-2 実践的指導力育成と地域との連携

#### 〔現状〕

教職課程センターでは、学校園のボランティア・インターンシップ募集の情報を学生に提供しており、学生が附属幼稚園・附属小学校・連携学校園でのボランティアを申し込む際の窓口となっている。

初等教職課程では、次の取り組みを行っている。

- ・岡山市学校支援ボランティア、倉敷市学校園支援ボランティアへの登録を学生に呼びかけている。特に、3年次の実習後のボランティアは学校園から大変喜ばれている。
- ・インクルーシブ教育研究センターと連携し、各園の特に支援の必要な幼児を支援する「幼稚園サポートプロジェクト」を実施している。学生は、附属幼稚園と近隣にある特定の公立幼稚園へ定期的にボランティアに行き、振り返りの記録を残している。月に一度、教員や臨床心理士のコーディネーターが参加し、学内でカンファレンスを行っている。
- ・岡山県教育庁保健体育課より県下の大学に依頼のあった「体育授業スペシャルサポーター派遣事業」に児童学科7名の学生が申し込み、そのうち4名の学生が数時間ずつの授業支援に入った。今年度は、支援に入った4名の学生とカンファレンスを行い、成果と課題について話し合い、その様子を学科ブログに掲載した。
- ・1年次から、インクルーシブインターンシップの授業をカリキュラム上に位置付け、保育・教育現場のみならず地域の事業所、NPO等の取組に参加して特別支援に関する視野を広げられる活動を単位化している。
- ・毎月1回程度のカンファレンスを実施して、インクルーシブインターンシップでの学びをリフレクションする機会としている。

- ・インクルーシブ教育研究センターと連携し、小学校に在籍する特に支援を必要とする児童を支援する「小学校サポートプロジェクト」を実施している。学生は、提携している小学校に定期的に入り、自分の活動の振り返りの記録を残している。月に1回程度、学内でカンファレンスを行い、活動のリフレクションを行う場としている。中等教職課程では、次の取組を行っている。
- ・実践的指導力の育成のために、教育実習事前事後指導において、教育活動に参画する意識を高め、将来教員になるうえでの能力や適性を考えるとともに、教育実践に関する基礎的な能力と態度及び教育者としての課題を自覚できるよう、指導の充実に努めている。
- ・教員としての資質・能力の向上並びに教育上の諸課題に対応するため、岡山市教育委員会と連携協定を締結している。(資料3-2-1)
- ・岡山市学校支援ボランティア、倉敷市学校園支援ボランティアおよび附属小学校でのボランティア活動を通して、教員に求められる資質や児童・生徒との関わり方などに関して多くのことを学ぶ機会を提供している。
- ・教職相談室で、教職相談員から、教育活動全般についての個別指導が行われている。(資料3-2-2)
- ・教職実践演習の特別講義講師として現職教員を招き、教育実践に関する基礎的な能力と態度及び教育者としての自覚の育成に努めている。(資料3-2-3)
- ・1年次に特別支援教育基礎論、2年次、3年次に各教科教育法、各教科指導法演習における特別な配慮の必要な生徒への対応、4年次教育実習事前指導、教職実践演習など、インクルーシブ教育をカリキュラムに段階的に位置づけている。
- ・岡山県、岡山市教員等育成協議会において育成指標を共有し、養成段階から連携協力している。

#### 〔優れた取組〕

教職課程センターでは、次のとおりである。

- ・岡山市学校支援ボランティアの学内説明会を主催している。
- ・岡山市、岡山県、香川県のほか県外の教育委員会等と連携して、教員採用試験説明会、講師登録説明会を主催し、学内で開催している。

初等教職課程では、次のとおりである。

- ・「小学校サポートプロジェクト」での活動後に各自が記録を残し、参加学生で共有している。
- ・自身の活動を振り返って言語化したり、カンファレンスで共有したりすることが学生自身の学びとなっている。

中等教職課程では、次のとおりである。

- ・教育実習事前事後指導および教職実践演習では、教科別(教員免許状種別)の授業内容が編成されており、より実践に即した指導能力育成を図ることができる。
- ・現職教員による特別講義により、教育者としてのモチベーションの向上を図ることができる。
- ・教育実習での経験を教育現場に結び付けて考えることができる環境を整えている。
- ・元学校長の経験豊かな教職相談員による相談・支援により、職務内容を実地に即して理解し、教科指導以外の様々な場面でも適切に生徒と関わることを学べる力を涵養している。
- ・情報デザイン学科における教職課程では高等学校情報科一種免許のみ取得可能であるため、教科の指導法に関する科目の制度上の所要単位数は4単位であるが、本学では2025年度以降、「情報科教育法Ⅰ」「情報科教育法Ⅱ」(計4単位)以外に「情報科指導法演習Ⅰ」「情報科指導法演習Ⅱ」(計4単位)を必修科目として設けて教科指導法に関する学習や模擬授業・授業研究の時間を十分に確保し、実践的な教育力の育成を図っている。

#### 〔改善の方向性・課題〕

初等教職課程では、インクルーシブインターンシップの活動のリフレクションと学生個人々人へのフィードバックに課題がある。

中等教職課程では、新型コロナウイルス感染症の5類感染症移行後、ボランティア活動等の体験活動は回復傾向にある。

#### <根拠となる資料・データ等>

- ・資料3-2-1：岡山市教育委員会との連携協定書
- ・資料3-2-2：教職・保育職に関する個別相談件数  
[https://www.ndsu.ac.jp/career/situation\\_teach.php](https://www.ndsu.ac.jp/career/situation_teach.php)
- ・データ：ノートルダム清心女子大学 2025年度シラバス  
<https://www.ndsu.ac.jp/department/syllabus.html>

### Ⅲ. 総合評価（全体を通じた自己評価）

本学教職課程において評価できることは以下のとおりである。第一は、建学の精神に則った本学の教育理念に基づいて、全学的に教職課程における教員養成の目的、目標を共有して教育を実施していることである。第二は、初等教職課程及び中等教職課程を軸に、各学科教職課程における学生一人一人に応じたきめ細かな指導を基本としていることである。第三は、各学科教職課程における指導を基本としつつ、教職課程センターを中核として、全学的に教職課程を運営する体制を整備していることである。第四は、大学の理念に即して設置されたインクルーシブ教育研究センターとの連携を図り、全学的にインクルーシブ教育を重視したカリキュラムを編成し教育を実施していることである。第五は、教育委員会との連携を図り、育成指標を踏まえた教員養成の実施に努めていることである。こうした建学の精神に則った本学の教育理念に基づく指導体制の充実によって、多くの女性教育者を養成し、地域社会に大きく貢献して、絶大な信頼を得ている。

今後の課題は、以下のとおりである。第一は、現在の緊要な課題となっている情報通信技術を活用した教育の実施に必要な環境整備に努め、実践的な取組を充実させていくことである。第二は、教職課程の実施に関する教職課程自己点検・評価を充実させ、2024年4月に開設した新学部新学科の教職課程も含めた教職課程の質保証に向けて改善を継続していくことである。

### Ⅳ 「教職課程自己点検・評価報告書」作成プロセス

2024年4月に開催した教職課程センター所属の教職員による会議において、「教職課程自己点検・評価報告書」の内容構成の確認を行い、初等教職課程及び中等教職課程の教員が分担して執筆し、教職課程主任、初等教育主事、中等教育主事の3名で内容の確認、編集をすることとした。2024年10月に関係教員に執筆依頼をして、12月原稿締切、1月～2月内容確認、編集とした。2025年3月作成完了し本学ホームページに掲載した。

2025年度は、教職課程センターを中心に初等教職課程及び中等教職課程の教員で分担して、内容や数値データ、根拠資料等の点検と修正を実施した。